様式４

小学校外国語科における文構造への気づきを促すアプローチ：日英語の対照を通して

鳴門教育大学大学院学校教育研究会高度学校実践専攻
教科実践高度化　言語・社会系教科実践高度化コース
英語科教育実践分野　　指導教官　　眞野　美穂
南国市立日章小学校　教諭　　田村　なつみ

【研究の概要】
平成３１年度より施行された学習指導要領により，教科化となった小学校外国語科の今後の在り方や小中連携を視野に入れた学習内容の工夫が必要になってくるのではないかと考えた。外国語科のみで学習するのではなく，同じ言語を扱う国語科との連携は必要不可欠なものである。そこで，母語である日本語と英語の相違点に着目することで，各言語の特徴，特に文構造への気づきを促す言語教育の教材開発を行っていくことを目的とした。単元の中で扱われる中心的な表現を繰り返す中で，文法の用語や用法は使わず，視覚的な支援教材を用いて児童の気づきを引き出したい。また，国語科との連携を意識し，国語科副読本『ことばのきまり』を活用して，日英語の差異についての気づきを深めていく。

【キーワード】
小学校外国語科，国語科，文法指導，文構造

１　はじめに

⑴　研究の背景

置籍校は，文科省から「英語教育教科地域拠点事業」の指定を受け，外国語活動・外国語科の研究を行ってきた。特例校として第1学年から外国語科活動を実施し，第3学年からは英語科，第5学年からは外国語科と位置付けられている。その後，2年間「生活科・総合的な学習の時間の研究協力校」の指定を受けた。これまでの研究を通して，児童が日常的に自然と口にできる英語“使える英語”の習得のためにはどんな学習が必要なのか，について考えるようになった。置籍校は，第1学年から外国語（主に英語）に触れている児童にとって，英語教育は身近なものとして捉えられており，学校生活の中で簡単な英語でやり取りする様子やALTに自ら話しかけにいく児童を頻繁に見ることができる。一方で，第5学年から外国語科での学習が下学年で学習したことの復習が大部分を占め，内容が重複することがあったり発達段階に応じて英語を話すことに恥ずかしさを持つようになったりと外国語科に対する児童の意欲を引き出すことが難しくなってきている。第1学年から英語を学習している強みを生かして，中学校とのつながりを意識した学習内容の工夫や改善，新たな教材開発，指導内容の柔軟性を感じていた。

⑵　研究目的

平成31年度より施行された学習指導要領により，教科化となった小学校外国語科の今後の在り方や小中連携を視野に入れた学習内容の工夫が必要になってくるのではないかと考えた。また，外国語科

のみで学習するのではなく，他教科との連携という視点に立ったとき，同じ言語を扱う国語科との連携は必要不可欠なものである。そこで，母語である日本語と英語の相違点に着目することで，各言語の特徴，特に文構造への気づきを促す言語教育の教材開発を行っていくことを目的とする。

２　先行研究の概観

⑴　文法と気づきについて

文部科学省（2018a）小学校学習指導要領解説エ文及び文構造について「日本語と英語の語順の違い等に気付かせるとともに，基本的な表現として，意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること（p.91）」とある。文構造についてのみを指導するのではなく，児童がコミュニケーションを図る活動の中で文構造の大切さに気づいていくことを目指しており，コミュニケーションを図る上で大切にしたいと思えるような帰納的な指導であることが求められている。また，気づきとは，村野井（2006）によると，第二言語習得は，「気づき」（noticing），「理解」（comprehension），「内在化」（intake），「統合」（integration）という認知プロセスを経て進んでいくと考えられている。気づきは「理解」の必要条件であると考えられるが，一方で気づいてはいるけれど，理解できない状態もあるとも述べている。

この「気づいてはいるけれど，理解できていない状態」が小学校外国語科の文・文構造における「気づき」になるのではないかと考える。私はこの「気づいてはいるけれど，理解できていない状態」が小学校外国語科の文・文構造における「気づき」になるのではないかと考える。図1にその状態を図示してみる。合わせて，意識することで初めて気づくことができる状態であるとし，その「気づき」を促す教材を考えていく。

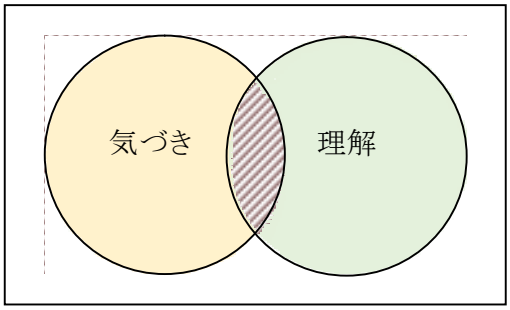

図1　気づいてはいるけれど理解できていない状態（斜線部）

⑵　外国語科と国語科の連携

文部科学省（2018b）小学校学習指導要領国語編では他教科等と関連についての配慮事項として，「(8)言語能力の向上を図る観点から，外国語活動及び外国語科など他教科等との関連を積極的に図り，指導の効果を高めるようにすること。(p.159)」とあり，教科横断的な指導が求められている。これからの外国語活動・外国語科では，国語科との連携を図ることが必要とわかる。現行の学習指導要領の改訂に向けて，中央教育審議会教育課程部会では，研究チームの1つである「言語能力の向上に関するチーム」は，母語である日本語の使用においては，意識的に育成する機会が少ない資質・能力があることを指摘しおり，それを育成するために外国語教育を通して日本語の使用だけでは気づくことが難しい言葉の働きや仕組みへの気づきを促せば，日本語についての資質・能力の向上も期待することができるとしている。各学校における実際の取組事例においても，相互の連携を図ることで，国語科で学んだことが英語での表現活動に生かされたり，英語と日本語の特徴や違いに気づき，言語を学ぶことに対する関心が高まったりするなど，学習に相乗的な効果が見られるとの例が報告されている。

また，高知県で活用されている国語科副読本『ことばのきまり（第5学年）』pp.4-5 で記載されている主語と述語についてのページである。主語と述語の使い方の説明が示されており，練習問題に取り組むようになっている。国語科での連携を視野に入れたとき，本研究は文構造に関するため，図1に示す文構造についての「主語と述語」のページを取り上げることとする。また，第5学年で扱われているため，研究対象第5学年児童にとって既習内容であることも押さえている。

３　研究内容

(1)　実践計画

先行研究の概観を元に，表1の実践計画を立てる。大きく2つに分けて実践研究を行うこととする。実践研究Ⅰでは2つの単元を通して，実践研究Ⅱでは国語科との連携を視野に入れた教材を通して文構造への気づきを促すアプローチを行う。

表1　実践計画

4月～5月	○実習校の実態把握 ・対象学年への事前調査 ・事前意識調査結果をもとに，実践活動内容計画の作成 ・実践活動計画に基づいた教材作成	Research Plan
6月～7月	○学校課題フィールドワークにおける実践研究 ・T1 として授業の実践（実践テーマ1～3） ・学級担任，指導担当，英語担当，ALT から助言や児童の感想を受け，教材・授業の改善 ・対象学年への確認テスト，活動事後調査	Do Check
8月～9月	○実践1～3における評価と分析 ・調査結果をもとに，成果と課題を明らかにする。 ・実践1～3の課題を基づき，10 月の実践活動計画の作成 ・実践活動計画に基づいた教材作成	Plan
10 月	○学校課題フィールドワークにおける実践研究 ・T1 として授業の実践（実践テーマ4～6） ・学級担任，指導担当，英語担当，ALT から助言や児童の感想を受け，教材・授業の改善 ・対象学年への確認テスト，活動事後調査	Do Check
11 月～	○実践4～6における評価と分析 ・調査結果をもとに，成果と課題を明らかにする。 ・実践研究の成果と課題のまとめ	Action

どの活動も児童に寄り添った活動となるように児童の実態把握に努めたい。そのため，毎時間の振り返り調査や他教員の協力を得ながら活動の事後分析を行い，次の活動へとつなげられるように，PDCA サイクルとなるよう意識して研究を進めていきたい。

４　実践研究Ⅰの結果と考察（5月～7月）

2つの単元「Where do you want to go?」「I want to see the Milky Way.」で基本的な表現に触れる表現活動を通して，文の語順や文構造に気づき，伝えたいことを英語で表現するとき児童が自ら選択した語と語を組み合わせて表現できるように，様々なアプローチからその活動を成立させていく。

日時　2021 年 5 月 21 日～2021 年7月 13 日　　教材　*Junior Sunshine6*　開隆堂

対象　置籍校　第6学年　22 名

(1) 実践テーマ1「列車型カードを用いた文構造への気づき」

英語の文を構成する主な要素である主語，述語，目的語の単語をそれぞれの色別で示し，それらが列車のようにつなげられる工夫をした。文法の用語は使わず視覚的な教材により文構造に気づけるようにしたい。黒板に貼る掲示用と児童が手元で操作できるような小さいカードを準備した（図２）。また，動詞には自動詞と他動詞があることにも触れたい。文を構成する上で，述語が自動詞であるか他動詞であるかによって文構造が異なってくる。

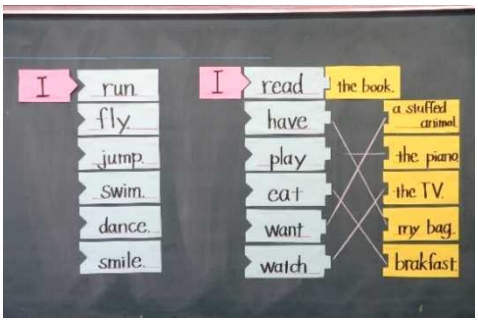

図２　児童用カードを用いた作業の様子（左）と自動詞・他動詞を使って文を組み立てた板書（右）

ア　4月 21 日　実践テーマ1の実践①

これまでの学習で扱った動詞を児童から出してもらい，その動詞の絵カードと列車型になっている単語カードを自動詞と他動詞に分けて掲示する。児童にどんな違いがあるのか問うと，「(自動詞は）自分の体だけを使って表現している」「(他動詞は）手で物を使って表現している」という意見が出てきた。動詞には２つの種類があること，そして片方の動詞（他動詞）には動詞の後ろにその動作の目的となる言葉が付くことを，活動を通してなんとなく気づいているようだった。

表２　児童の振り返り一部抜粋

動詞には種類がないと思っていたけど，実は種類があってびっくりした
run や fly は I とつながるだけで文ができるけど，eat や read は I とつなげるだけじゃなくて「何を」がいると知った

イ　５月 25 日　実践テーマ１の実際②

前時での動詞を使った文の組み立てを生かして，本単元で押さえたい外国の観光地について学習した。その際，そこで何ができるのか，基本表現“I want to＋動詞～”の形にして一緒に考えた。「*Junior Sunshine6*」で取り上げている外国の観光地や有名な物事などを黒板に掲示し，それにあった動詞のカードを貼り付けている。ある児童はオーストラリアのカンガルーの写真に“see”を貼っている。この他に中国の万里の長城に対して“walk”“see”だけでなく「run もしたい！」と発した児童がいた。いろんな動詞が want to とつながることで「～したい」という文になることを無意識化の中で学習していくことができただろう。

表３　児童の振り返り一部抜粋

「行く」「歩く」「走る」「見る」などの一つのもので，いろいろな動詞が使えるんだと思った
動詞（want）と動詞の間には to を入れると，二つの動詞をつなぐことができると知った

⑵ 実践テーマ2「疑問詞を使った疑問文の語順への気づき」

これまで児童はたくさんのフレーズを表現してきているが，言い間違える場面が多々見られる。そこで，“Do you go to…?” や “Do you want to go to…?”，さらに “Where do you want to go?” の文構造との違いに気づくことで言いたい表現の区別ができるようにしたい。

ア 5月 28 日 実践テーマの実際

スライドで “Do you want to …?” と “Where do you want to go?” の文構造の違いを知った後，その表現を使ってペア活動を行う。一人ひとりが各国の国旗カードを持ち，そこへ行きたいと仮定して答える。尋ねる方は，相手が行きたい国に合わせて「～したいですか？」と尋ね，それに対して Yes or No で答える，という会話表現を使った。相手が持っているカードの国に合わせて “Do you want to…?” と尋ね合う表現活動は，これまでの与えられたフレーズの中だけで表現するのではなく，児童が尋ねたいことを当てはめることで表現の幅を広げたいと思い取り組ませた。黒板に出ている観光地や食べ物を参考に言う児童もいれば，これまでの学習から得た知識から自分で考えて言う児童もいた。

A: Where do you want to go?
B: （カードがエジプトであったため）I want to go to Egypt.
A: Oh, nice. Do you want to see the pyramid?
B: Yes, I do./ No, I don’t.
A: I see. Thank you.

図３ ペア活動の様子とその会話表現

表４ 児童の振り返り一部抜粋

一つ一つの Where や What の意味を知ると，いろんな尋ね方でやり取りするときはどのように並べたら意味がおかしくないのが分かりました。
今日の英語はいつもよりも楽しかったです。

⑶ 実践テーマ3「人称代名詞と be 動詞の組み合わせへの気づき」

本単元『I want to see the Milky Way.』は七夕が題材になっている。物語の中では人称代名詞によって誰のことを指しているのかがよく分かるため，物語を皮切りに発展させていく。人称代名詞それぞれが誰を指しているのかを理解することはもちろん，人称代名詞に合う be 動詞を知ることができるようにする。

５ 実践研究Ⅱの結果と考察（10 月）

本実践研究では英語科としての活動ではなく，国語科の位置づけとして言語に着目した活動を行っていくこととする。そのため，英語の表現に慣れ親しむというよりは，日本語を介入して日本語と英語の文法を比べてその相違点から文の仕組みや文構造に気づくことができることをねらいとした。

日時 2021 年 10 月 18 日～10 月 22 日 教材 *Junior Sunshine 6* 開隆堂

対象 置籍校 第６学年 22 名

⑴ 実践テーマ4「文法（日英語の語順とその差異）」 10 月 20 日実施

第５学年国語科教材を活用し，日本語と英語の文の組み立てや語順について比較した。日本語では「田中さん」「石川さん」「手紙」「書く」の単語を使った文の組み立てを，英語は“Plants”“Bugs”“eat”の３つの単語を使った文の組み立てを考えた。日本語と英語の文の組み立てには違いがあることを,児童自らが文を組み立てる活動を通して知っていく。日本語と英語を比べることによって，日本語の仕組みにも目を向けることができたり，英語には助詞の必要はなく，語順によってその文の意味を成り立たせていることに気づくことができたりしていた。

表６　児童の一言振り返り一部抜粋

日本では順序を入れ替えても意味が同じだけど，外国語（英語）で単語を入れ替えたら意味が変わるということを知りました。
日本語と英語では同じことをしていても意味が全然違っていた。

⑵ 実践テーマ5「構造的あいまい性」 10 月 21 日実施

構造的あいまい性を活用して表現の捉え方の多様性から言語の面白さを感じ取られるように目指した。日本語では「白いネコの赤ちゃん」，英語では“tall boys and girls”を提示する。児童にこの文からどんな想像ができるか問うと，日本語でのあいまい性にはすぐに気づいていたが，英語での“tall boys and girls”は，すぐに理解できていない様子の児童がいた。しかし，児童の振り返りは，あいまい性の難しさを感じた感想よりも，英語にもあいまい性があることを知り，日本語と異なる点ばかりでなく共通することもあるという発見や，人に伝えるときには正確に伝えられるようにしたいと，今後の生活に生かせられるような感想が見られた（表７）。日本語と英語は全く異なる言語であるが，あいまい性という類似性を知ることで言語の共通性や面白さを感じられていた。

表７　児童の一言振り返り一部抜粋

いつも使っている日本語でもあいまい性でわかりにくいことがあるんだと思いました。
英語の文と日本語の文では違うところばかりだと思っていたけど，英語と日本語の共通するところがあると知りました。

⑶ 実践テーマ6「文法（日英語の語順とその意味）」 10 月 22 日実施

高知県で活用されている国語科の副読本「ことばのきまり」の第５学年で扱われている主語と述語を取り上げ，文の語順について考える。日本語も英語も動詞を提示し（表８），絵に合うような文を児童に考えさせる。どんな文でも，日本語は主語，述語，目的語の順になっていること，英語は主語，目的語，述語になっていることに色分けをすることで気づくことができていた。

表８　提示した動詞とその文

動詞　日本語／英語	日本語の文	英語の文
歩く／walk	私は歩く。	I walk.
散歩する／walk	（私は）犬を散歩させる。	I walk my dog.
食べる／eat	（私は）朝ごはんを食べる。	I eat breakfast.
する／do	（私は）宿題をする。	I do my homework.

児童の振り返りからは日英語の違いを明確に気づいていたことが見取ることができたが，その違い

を知った上で英語の学習に対して難しい，大変と感じていることも分かった。

表９　児童の振り返り

日本語の文と英語の文では順番が異なる。それを色で表すことによってよく分かりました。
英語は国語ととっても深く関わっているなと思いました。英語のことをこれからももっと勉強していきたいです。

６　研究のまとめ

(1)　児童の意識の変化

意識調査を事前，中間，事後と実施した。それぞれを比較して，児童の意識の変化を考察する。

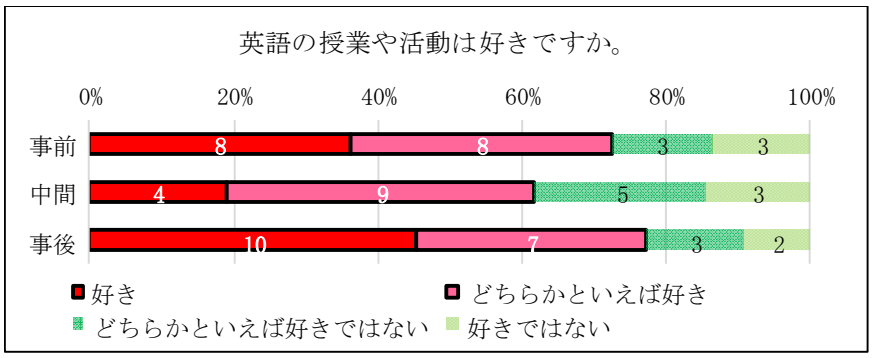

図4　意識調査の回答分布①

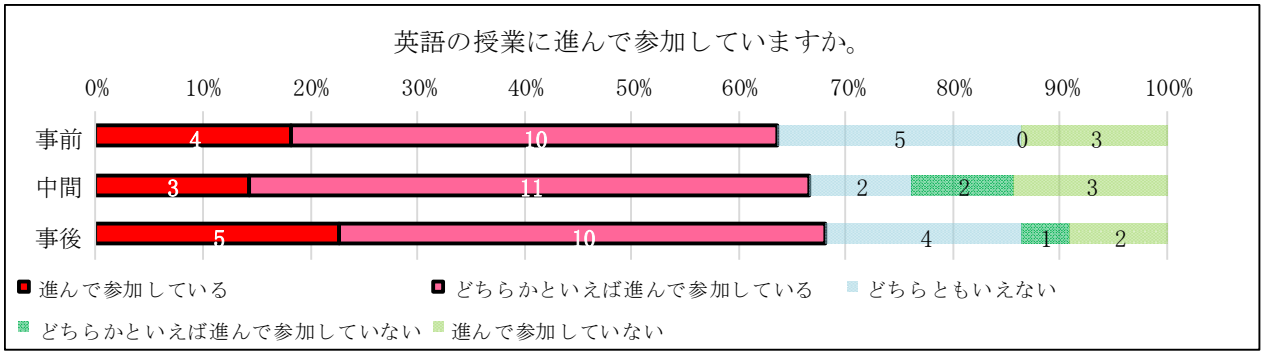

図5　意識調査の回答分布②

分布から見て分かるように，英語学習に対して一定数苦手意識を持っている児童がいること，同じように好き，得意と感じている児童がいることが分かる。

(2)　研究の成果と課題

ア　成果

(ｱ)　文構造への気づき

英語における文・文法及び文構造に関しての指導は，専門的な用語を使わず，児童が既習内容からつなげて気づいていき，文法を知るきっかけとなった。これまでの学習でなんとなく気づいていたことが確信へと変わっていったり，やり取りで使う表現が多様になったりしたことが見て取れた。加えて，これまでにない授業のスタイルや学習内容であったため，児童は新鮮さを感じ，知的な面白さも感じられていたと振り返りから明らかとなった。一概に難しいという思い込みから指導しないのではなく，児童の実態に寄り添った教材や支援の工夫で文構造への気づきを促すことができると分かった。

(イ)　外国語科と国語科の連携

実践研究Ⅱでの児童の振り返りでは，ほとんどの児童が活動に対して肯定的な回答をしており，日英語の対照を通した活動の手ごたえを感じることができた。国語を介在させることによって，外国語の新たな発見を児童自らすることができたと同時に，国語科の面の言語的学習の理解を深めることもできたのではないかと考える。

イ　課題

(ア)　評価の仕方

本研究の目標である文構造への気づきを，何をもって気づいたと言えるのか，目に見えない部分をどう見取るべきなのか，評価の難しさを痛感した。「気づき」の評価としては，児童の振り返りが適しているのではないかと考え，毎時間の授業，活動ごとに児童に学習して分かったことや気づいたことを書いてもらうように指示した。ⅠもⅡも全員の素直な感想を得ることができるとは限らず，また児童によっては，振り返りは前向きに書かなければならないという意識が働いていることもあると感じ，本当に気づくことができているのか，困ったことや分からなかったことはなかったのかを全て見取ることは難しいと思っている。

(イ)　より精選された教材の工夫

事前意識調査から英語に対して苦手意識をもっている児童や英語を読めない，学習意欲が高くない児童にとっても分かりやすい，参加したくなるような活動，教材を意識して臨んだ。しかし，どの活動でも全員が肯定的な振り返りになることはなかった。一人ひとりが英語学習を前向きに捉えられるような教材の工夫について更なる研究は必要であると感じる。

(3)　今後の展望

実践研究を通して，置籍校の課題に対して新たな教材開発をすることができた大きな成果を得たが，それが本当に適切であったのか，児童にとって十分な指導ができたとはいえず，課題が残った。今後，外国語活動，外国語科の授業を行うときには，児童に合わせて最善の指導内容，方法を考えていく必要がある。特に，本研究は文構造に焦点を当てたが，外国語科の目標は４技能５領域の定着であり，文構造への気づきを通してその４技能が向上することが理想である。本研究のように短期集中型で指導されるものではなく，長期持続的に実施していけるよう，現場に戻ってからも研究を続けていきたいと思う。得た成果や課題を踏まえ，さらに改善を図りながら，児童が「面白い」「楽しい」と思える授業づくりを目指して，小学校外国語教育の充実に努めていきたい。

参考文献

秋田喜代美ほか(2019)『新しい国語　五』東京書籍.

ことばのきまり研究委員会(2018)『ことばのきまり』ことばのきまり研究委員会.

文部科学省(2016)中部教育審議会教育課程部会「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」平成 28 年8月 26 日教育課程部会資料.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/__icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf　2021 年 2 月 13 日閲覧

文部科学省(2018a)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　外国語活動・外国語編」開隆堂出版.

文部科学省(2018b)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　国語編』開隆堂出版.

村野井仁(2006)『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.

萬谷隆一ほか(2020)『*Junior Sunshine 6*』開隆堂.